



十月二十七日に閉幕した「あいちトリエンナーレ2013」を振り返り、掲載した記者座談会（同二十八、二十九日付）に、読者の皆さんや関係者からさまざまな意見が寄せられました。

記事は、前回トリエンナーレも取材した記者らが今回も各会場に足を運び、関係者の声も反映して構成しましたが、トリエンナーレのパフォーミングアーツ統括プロデューサーを務めた小崎哲哉氏からは、事実と反するなど十件の指摘を受けました。このうち、記事の内容が不十分だった箇所を再掲します。

一つは「劇場や街中でのパフォーマンス（身体表現）の観客動員は、主催公演の規模や本数が縮小されて減った」とした点で、本来は劇場公演のみを取り上げるべきでした。街中を合わせると、正しくは動員は約一万人増えました。また「観客動員が楽勝と思われた小ホール公演が中盤以降は難解な先鋭性が際立ち、客足が鈍った」との点は、「観客数は後半一上演あたりは微増したが、前回に比べて盛り上がりかけた」でした。

関係者から「事実と反する」

「課題生かして」期待の声も

記者座談会については、ネット上で、現代美術関係者から「酷評が過ぎる」旨の批判の声もあります。一例として、「よそから持ってきた現代アートなるものを集中的に縦覧させて、地元を疲弊させるだけだろっ」の部分。しかし、発信すべきものを問い直すため、例えば、窯業をはじめ地元が誇る産業科学技術との連動を提案するなど、記事の趣旨は特色ある「あいちトリエンナーレ」実現の模索にあります。こうした意見は特に、地元の美術関係者らに根強くあります。読者からは「一来場者の市民として、パリアフリーなどの点をはじめ、課題はたくさんあったと思います。これらを受け入れて次につなげてほしい」との声もありました。主催者側にも次回開催に向けて、いずれも一考に値する視点ではないでしょうか。